

ある、したがって、この会誌に毎号最低一編の報文の発表を考えた。おかげで Vol. 10, No. 5 までに58編の報文を発表させていただいた（この考えは現在も継続している）。(参考、わたしは、昆虫に関する報文を各会誌とか単行本、その他に出しているが、その数が1994年末で587編に達している)。兵庫県生物学会は、県下の高等学校の先生方が中心の学会で、わたしのように全くのアマチュアで、ただ単に「虫が好きだ」といった会員は大変少ないように思われる。

機関誌『兵庫生物』は、この50年間各巻平均して308ページとなっているが、第5巻の452ページ、第3巻の437ページと大変多くの報文が発表された巻もあれば（その中でも第6巻、第2号と第3号の間に特別号として151ページの大冊『兵庫県植物目録』が発行されている）、第10巻になると平均にも足りない225ページになっている。その間、虫についての報文は、各巻平均17編あるが（こちらも、Vol. 7が26編、Vol. 3～6が各20編以上の報文がある）、第10巻になると9編に減少する。

これからの『兵庫生物』はどのように発展するのか、兵庫県の生物を中心にした研究調査の結果の発表の場として、おおいに発展してもらいたいと同時に「虫」についてのすぐれた研究発表を期待しているものである。

(たかはし としお：常任理事)

『高校生物ハンドブック』発刊の思い出

内波 秀一

昭和30年代ころから、自然科学のあらゆる分野での大発展の影響による生物教育の教育課程の大変革がおこり、兵庫県生物学会の会員研究、研修活動が盛んになっていった。

研究誌として伝統と権威ある『兵庫生物』のほかに、高校教育研究会の『生物部会誌』を発行し、教員研修をめざした「現代生物学ゼミナール」も大学教授を招いて年に4～5回も開かれるという状況になった。

当然、活動のための基金をどうするかということが大きな課題となり、渋谷久雄先生（明石高校）を中心に県生物学会の事業として、問題集の発行、あるいは、生物実験書の発行が企画されて実行にうつされたが、県下全域の先生方の参加を得られずに数年で中止された。

一時は京都の教研出版社の問題集を兵庫県内版としてつくり、販売部数に応じて生物学会へ寄付していただくという苦肉の策もとられた。

昭和37年にわたしが県立夢野台高校に転勤し（当津先生が在勤中）昭和38年2月ころだったか、学習のまとめ編、問題編、実験編を一つにし、巻末にノーベル賞級の生物学史の紹介をのせて『高校生物ハンドブック』と命

名する本を出版する企画がまとまり、編集長を当津先生、会計担当をわたくしがということで実施することに決定した。

初期の編集委員として熱心に出席された先生方は兵庫高校（室井 綽、岡村はた、近藤昭一郎）、長田高校（安房 明、前田米太郎）、葦合高校（渋谷竜二、東 敏男）、赤塚山高校（小久保富男、浜田史郎）、須磨高校（東 克彦）、明石高校（渋谷久雄、西敦義）、加古川東高校（杉田隆三、伊藤幸夫）、加古川西高校（金沢 竜）、そのほかの先生方であった。編集長から各高校へ趣意書を送り原稿を書く依頼を重ね、段ボール箱数個の原稿が集まった。編集委員が分担して執筆し、昭和39年が初版だったと思う。1冊定価150円で1万冊余り印刷し、見本を送送、注文をとると1万冊突破、あわてて5千冊の増刷を依頼し間に合わせたことを思い出す。

それからは毎年、小改訂（訂正、問題のさしかえ）を行い、3年ごとに大幅改訂を行なうために、県下全域の先生（特に採用校）に案内し、須磨国民宿舎で反省会を開いた。編集委員会議は9月、10月の日曜日を利用して、会社の寮を借りて開かれ、本当に良い勉強会になったと思っている。

昭和42年ころは最盛期で2万冊をこえる発行、高校部の運営費として本部会計へ毎年約30万円の納入（高校部会でも一部利用）ができた。

その後、各出版社が、それぞれ、カラー版でみごたえのある問題集を出版しはじめ、兵庫県生物学会編の『高校生物ハンドブック』の売れ行きが低下していったが、事業の収益もさることながら、まとめ編、問題編、実験編の検討を通じて、会員相互の研修が大きな成果であったと思っている。（うちなみ ひでかず：常任理事）

“現代生物学ゼミナール”誕生・発展・終焉

安房 明

30年ほど前だっただろうか……『『生物物理』』という雑誌を書店で見かけるようになりました。……(略)……新造語(?)が生物学の中にもふえて来て、めまぐるしいほどです。日く分子生物学、日く人間工学 etc.……生物学そのものが超スピードで進んでいるようです。毎日まいにち、生徒相手の神経の疲れる仕事にたざざわっている私達教師には、新しい生物学の動向を身につけるとまがありません。しかし、少なくとも科学について関心を持つ私達としては、現代の科学の状況を正しく把握する必要があります。少しでも正しい把握をして正しい科学概念を生徒に伝えるのが、私ども理科担当者の責務だと思いますが、なかなかそこまで行かないのが現状です。このようなことを考えれば考えるほど、生